

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

〈自然〉の内と外：共同研究：驚異と怪異： 想像界の比較研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-04-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 山中, 由里子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009038

共同研究 ● 驚異と怪異—想像界の比較研究(2015年—2018年度)

＜自然＞と＜超自然＞の境界

驚異や怪異をめぐる文化的な事象の基盤に、「驚く」・「怪しむ」という、常軌を逸した現象やモノに対する心理的反応があり、それらは普遍的で直観的な思考回路のプラットフォームに直結したものであると、本誌156号に書いた(山中2017)。しかし、人類に共通の認知機能があるとするこうした普遍主義と、文化ごとに特有の心理システムがあるとする文化相対主義の2つの方向性は、決して相対立するものではなく、本研究の両輪であるということはここで強調しておきたい。

では、普遍的で直観的な自然理解と、文化的概念としての＜自然＞はどのように連関しているのか。この関係性を解明するには、自然界のどのような現象が超常的なものとして認識され、背景にどのような自然観があるのかを、地域や時代ごとに明らかにし、それらを比較する必要がある。

このような問題意識に基づき、2017年度は、「異形の身体」、次いで「驚異と怪異の場」、「異界とつながる音」というテーマを比較の軸として設定し、研究会を行った。いずれの会においても、＜自然＞と＜超自然＞の境界領域が共通の論点の1つとなった。

異形の身体

昨年7月8日と9日に、「身体」をテーマとした研究会を行った。まず黒川正剛(太成学院大学)が「西欧近世における魔女の身体・怪物の身体」について発表した。15-17世紀に西欧キリスト教文化圏に増殖した魔女や怪物表象を事例にとりあげ、これらが「自然の流れを脱して現れる」もの、あるいは「自然の戯れ」としてみなされていたことを指摘した。この時代、身体の異常の原因については、精液の過不足、妊婦の想像力などに加え、神の怒りや悪霊・悪魔の影響が論じられたが、17世紀後半～18世紀には奇形は科学的探究の対象とされ、「非神聖化」が進展した。



ヨーロッパでは16世紀以降、異形の身体に対する医学的な関心が高まった。Johann Georg Schenck, *Monstrorum historia memorabilis*, Frankfurt, 1609, p.88(国立民族学博物館所蔵)。

次に安井真奈美(国際日本文化研究センター)が「身体の妖怪画—エロスと医学と美術の狭間」と題して、江戸期の妖怪画における身体部位の欠落や誇張の表象に注目し、これらの図像を生み出した人々の想像力と身体観について論じた。怪異現象が起こりやすい身体の弱点と妖怪表象の間に関連性があるのではという指摘もされた。

西欧、日本の事例に続き、林則仁(龍谷大学)が「イスラーム世界の博物誌における異形の身体」について発表した。カズウィーニーが13世紀後半に編纂した百科全書『被造物の驚異』の写本挿絵が、イスラーム世界における異形の動物や民族の図像の伝統を確立したことを示し、さらにそれら図像のモデルとして、中世ヨーロッパの写本や地図に表された異民族の図像や、動物仮面の芸能があった可能性を示唆した。

最後に、特別講師の野元晋(慶應義塾大学)が「自然からの救済、自然による救済、そして自然の救済? シーア諸派の哲学思想の宇宙論と救済思想から—ジャービル・イブン・ハイヤーン、そして初期イスマール派の思想家たち」と題して、中世ヨーロッパの錬金術にも影響を与えた8～9世紀の科学者ジャービル・イブン・ハイヤーンの著作を中心に、新プラトン主義を組み込んだシーア派イスラーム思想における自然と人間の関係性について発表した。これまで本研究では、「驚異」を神(アッラー)の創造の力の徴(しるし)とみなす概念について論じてきたが、実はこれはスンナ派的思想であり、創造の行為を人間が模倣したり、操作したりすることができると思うシーア派イスラーム思想はかなり違うということがわかった。シーア派諸派の自然思想における「驚異」の概念については今後、精査する必要がある。

＜自然＞の内と外

11月2日と3日には、慶應義塾大学三田キャンパスにて、慶應義塾大学言語文化研究所公募研究プロジェクト「自然世界と人間—古代から近代におけるその比較思想史的研究」と当共同研究との共催で、「驚異と怪異の場—＜自然＞の内と外」と題した公開シンポジウムを開催した。さまざまな文化圏における＜自然＞の概念の境界領域は両プロジェクトが共有する問題意識であり、本共同研究メンバーの松田隆美が慶應義塾大学言語文化研究所の所長を務めていることもあり、協力を得て共催の運びとなった。

11月3日のシンポジウムに先立ち、前日には慶應義塾大学図書館の貴重書室において、共同研究に関連する稀覯本の熟覧を行った。同大学はインキュナブラ(印刷術の揺籃期に印刷された書物)の重要なコレクションを擁しており、そのうち、ヴァンサン・ド・ボーヴェによる『自然の鑑』やセヴィリアのイシドール『語源論』などの中世の百科事典のインキュナブラ版を閲覧した。慶應のメディアセンターのデジタルコレクションのサイトでも見ることができるが(<http://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/incunabula>)、実際の書物の量感を目の当たりにし、圧倒的な情



慶應義塾大学でおこなわれた「驚異と怪異の場——自然——の内外」の立て看板。奇しくも同時開催の古文書室展のタイトルが「国のうち・そと」(2017年11月3日、慶應義塾大学三田キャンパス)。

報量を実感することができた。この他、旧荒俣宏コレクションのうち、コンラート・ゲスナーの『動物誌』やアタナシウス・キルチャーの『地下世界』など、近世の挿絵入りの博物誌も閲覧した。

11月3日のシンポジウムは、午前中は異界との境界の地理的位置づけに関連した発表が2つあった。松田がまず「ヨーロッパ中世の驚異の『場』——聖パトリキウスの煉獄を中心に」と題して、ローマ・カトリックの世界観において天国と地獄の中間にあり、罪が浄化される場所とされる煉獄への訪問譚に注目した。死後世界の入り口が、アイルランド北部のダーク湖上の島にあるとされた聖パトリキウスの煉獄のように、地図上に実際に位置づけられ、肉体で体験できる「場」から次第に時代を経て、夢の中で訪れる「ビジョン」に変遷してゆくという指摘が興味深かった。ヨーロッパの西方の最果てに位置づけられた異界の入り口に対して、榎村寛之(斎宮歴史博物館)が「古代都市と妖かし——平安京で怪異が起こる場所」で示した日本中世の事例では、都の比較的近くに「鬼の出る空間」があるとされた。榎村は『今昔物語集』の壺鬼譚を平安京の地図上にマッピングすると当時の都の外縁部に分散することを挙げ、都市のすぐ外に異界があるという当時の人びとの境界認識を示した。この現世と来世の連続性は、都市周縁の野で風葬された遺体が朽ちてゆく過程を確認することができたということと関連性があるのではという指摘は示唆に富んでおり、午後のセッションの山内志朗(慶應義塾大学)による、「修験道と即身仏(ミイラ)信仰について」ともつながった。山内は、湯殿山信仰における一世行人の活動を紹介し、厳しい修行によって朽ちない体を作ることは、この世とあの世の境界に留まり、一般信者を弥勒菩薩に導くためであったと述べた。

つぎに、菅瀬晶子(国立民族学博物館)が「一神教における怪異の語り」と題して「パレスチナ・イスラエルの事例から」を発表し

た。現代パレスチナのアラビア語では、奇跡譚、驚異譚、そして不吉な出来事についての語りがすべて、英語の wonders に相当する「アジャーイブ」という用語で表されるというが、発表ではとくに人々が「怖い」と思うような話や死者にまつわる不思議な話、そしてジン(精霊)憑きの話の事例が「怪異の語り」として紹介された。怖い話を語ることや呪術的实践に対する強いタブー意識や、精神異常が「ユダヤ人のジン」のせいとされるというような状況に、現代パレスチナ・イスラエル特有の、抑圧され、政治性を帯びた精神世界を垣間見ることができた。

続いて桑川麻里生(慶應義塾大学)が「『古典的フルブルギスの夜』における異界像とゲーテの自然研究」において、『ファウスト』の「古典的フルブルギスの夜」に登場する精霊、魔女など超自然的存在にみられるホメロスの世界とシェイクスピアの世界の融合を指摘した。

最後に、国立民族学博物館外国人客員研究員として招へい(2017年11月6日～2018年1月29日)されているサラ・キューン(ウィーン大学)が“A Dervish with a Thousand and One Signs: Para-nomian and Supra-nomian Embodiments of the ‘Fools for God’”と題して、英語で発表を行った。「聖なる狂人」とされるカラダグルまたはダルヴーシュと呼ばれるイスラーム神秘主義遊行僧が、野獣を模倣するような独特の装束・身体加工・修行で自然の法則を逸脱(para-nomian)、あるいは超越した(supra-nomian)状態を体現すると報告した。これに対して、山内から人間世界における自己を捨てるために身体を動物化する点や、修行によって達する恍惚状態が重要である点が、修験道と通じるといふ興味深い指摘があった。

本年1月20日に開かれた今年度最後の研究会では、日本の祭事神事や話芸、西洋古典音楽のいずれにおいても、「異界とつながる」緊張感・不安感が、まず聴覚器官への刺激を通して生み出されるということが議論された。詳細は別稿に譲るとして、今年度の議論を通して浮かび上がってきたのは、自然と超自然、もしくは「この世」と「あの世」の心理的・物理的距離感の文化的な差である。境界領域の身近さ・遠さを客観的に量化できないか、今後検討してみたい。

【参考文献】

山中由里子 2017「『心の進化』から驚異・怪異を捉える」『民博通信』156: 20-21。

やまなか ゆりこ

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。専門は比較文学比較文化。単著『アレクサンドロス変相—古代から中世イスラームへ』(名古屋大学出版会 2009年)が、島田謹二記念学芸賞、日本比較文学会賞、日本学術振興会賞、日本学士院学術奨励賞を受賞。編著『<驚異>の文化史—中東とヨーロッパを中心に』(名古屋大学出版会 2015年)。